季刊

直江の津

◉直江津経済文化研究会◉

冬号

2004-5

12,1,2月

❖福永家文書に見る❖

「直江津」のまちのかたち

「望楼」のある家

高岡市伏木北前船資料館

◉ ひろば ◉

日本初の女性従軍記者から国際的平和運動家へ

山岸多嘉子

巻頭エッセイ◉このまちのこと

海の響き

【カメラの眼】

まちに賑(にぎ)わいを

時代まつり・おたや・花ロード

季刊 直江の津 第16号 冬号
2004・05―12・1・2

目　　次

■巻頭エッセイ・このまちのこと
海の響き　小島幸雄　3

■福永家文書に見る「直江津」のまちのかたち　花岡公貴　4

■「望楼」のある家　13

■ひろば
日本初の女性従軍記者から国際的平和運動家へ
山岸(小岩井)多嘉子　18

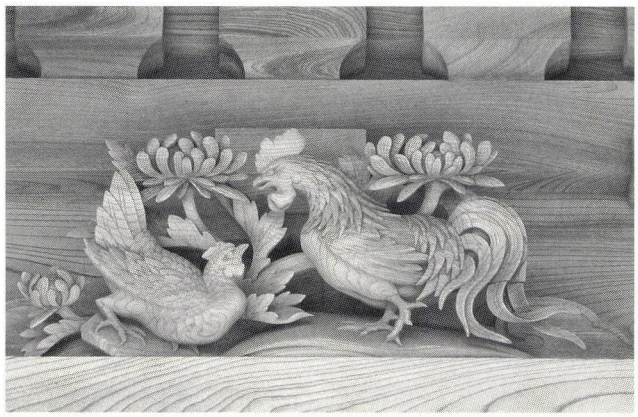
■カメラの眼　22

■読書びと　反省文ハワイ　山口智子著　28

■東西海陸　29

■歴史の風景　30

表紙筆文字は町名改正の願いの筆跡（明治11年「福永家文書」）より。
「直江の津」とは中世の物語に登場する直江津のことである。



五智国分寺三重塔（新潟県指定文化財）一層の彫刻
見事な十二支の彫刻は、年賀状のカットに使う人も多い。
25.85mのこの塔は、慶応元年(1865)に上棟したものの今だ未完成。

♣巻頭エッセイ
小島幸雄さんのこと

昭和27年　西頸城郡能生町生れ
富山市で勤務の後、昭和52年より上越市教育委員会学芸員
平成元年より上越市の五智に住む
上教大用地になった山屋敷Ⅰ遺跡の発掘調査を上越市での初仕事として、直江津駅南の伝至徳寺跡（室町時代の守護所跡）などの発掘調査を手がけている。
（編註）「春日山のことなら小島に聞け」と言われるくらい春日山（城跡）を歩きつづけている人でもある。

海の響き

小島幸雄

東京にいた学生の頃、夜行で直江津に降り立ったことがある。海の音を聞きに上野発十一時五十分頃の妙高に乗った。本当は能生の海を見たかったが、生まれた町に行ったらいつかは親に知られてしまうという心配もあり、列車の終着駅の直江津海岸に行った。ただ、海の音、波の響きを聞きたかったのだ。

ところで、東京にいてなぜ海の音を聞きに日本海側まで来たかというと、太平洋では周波数が違って筆者の心を癒してくれるリズムではなかったのである。長いのだ。その点、日本海は打ち寄せる時間が短く、気持ちが休まる周波数で波が寄せては返してくれた。こちらに就職して家を求める条件も、海に近いこととできれば五智にと考えていた。幸いにも、五智に物件を紹介されて所期の目的を果たした格好にはなった。

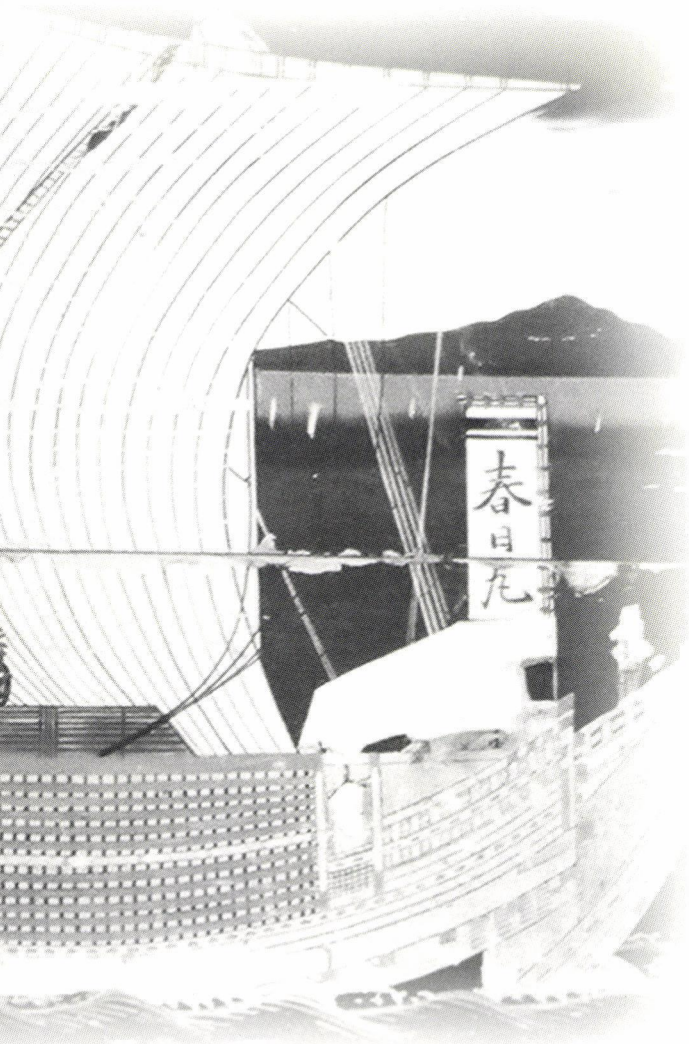
実は、直江津海岸に海の音を聞きに来たのは精神的な問題からだった。山もない、海もない東京では夜な夜な盛り場を徘徊して神経をぼやかすことはできても、すっきりさわやかな状態には程遠く、悶々とする日々が続いていた。直江津で一日を過ごし、風呂に入って再び夜行で帰京した。

ところで、その時の思い出がある。駅に降り立ってまず目に飛び込んだのは、「いかや」の八角形の洋館だった。昼に駅に戻り昼飯を「いかや」でとることにした。貧乏学生のこと、そのとき注文したのは「ラーメン」だった。「支那そば」と呼ぶにふさわしい醤油汁（？）に入ったラーメンの味はもう忘却の彼方だが、八角形の洋館と支那そばのミスマッチは今でも鮮明に記憶にある。たしか、奥にカウンターもあったように記憶しているが。

海の響きを思うとき、北海道航路で旅をしたときの印象も忘れられない。新潟に近づいてから柏崎くらいまで荒れていた日本海がウソのように静まったのだ。往路は岩内行きだったので奥尻島の陰もそうだったが、佐渡と本土の間は異様に波が静かだった。江戸時代の西廻り航路の寄港地として小木はあるが、正式には直江津（今町）には寄航することになっていない。大型で航行能力の高い弁財船であっても、日本海を往来する場合は波の穏やかな島影を選んだであろう。日本海に発達した江戸時代の海運を支えたのは、周波数の短い、私が聞き馴染んだ響きにだったのかもしれない。

書（じょ）に見る「直江津」のまちのかたち

上越市史編さん室 学芸員
花岡公貴 はなおかこうき



「直江津」と「今町」

はるか上杉氏の時代、現在の直江津地区には、越後国府と呼ばれる越後国の政治の中心である都市と、港町である直江津があった。国府とほぼ一体化していた当時の直江津は全国有数の人口を誇った都市であったと言われる。「山椒大夫」にも登場する往下の橋は、この直江津のシンボル的存在だった。むろん、このころ高田はまだない。

繁栄した直江津の町も、一五九八年（慶長三）に上杉景勝が会津へ移され、代わりに福井から堀秀治が春日山に入城して大きな転機を迎えることになる。秀治は春日山城に入ってわずか二年後の一六〇〇年（慶長五）には、福島城の築城を計画した。一六〇七年の完成までに八年余りの歳月をかけた福島城の城下には、春日山や国府から町とそこに住む人々が移って行った。こうして春日山城下とそれまでの国府は消滅し、福島城がこれに代わることになる。5ページ　図1は福島城のようすを描いた図だが、これをみれば、関川の左岸には直江町・今町の二つの町が存在していたことがわかる。

ところが、一六一四年（慶長一九）には、徳川家康の六男・松平忠輝によってこの福島

福永家文（もん）

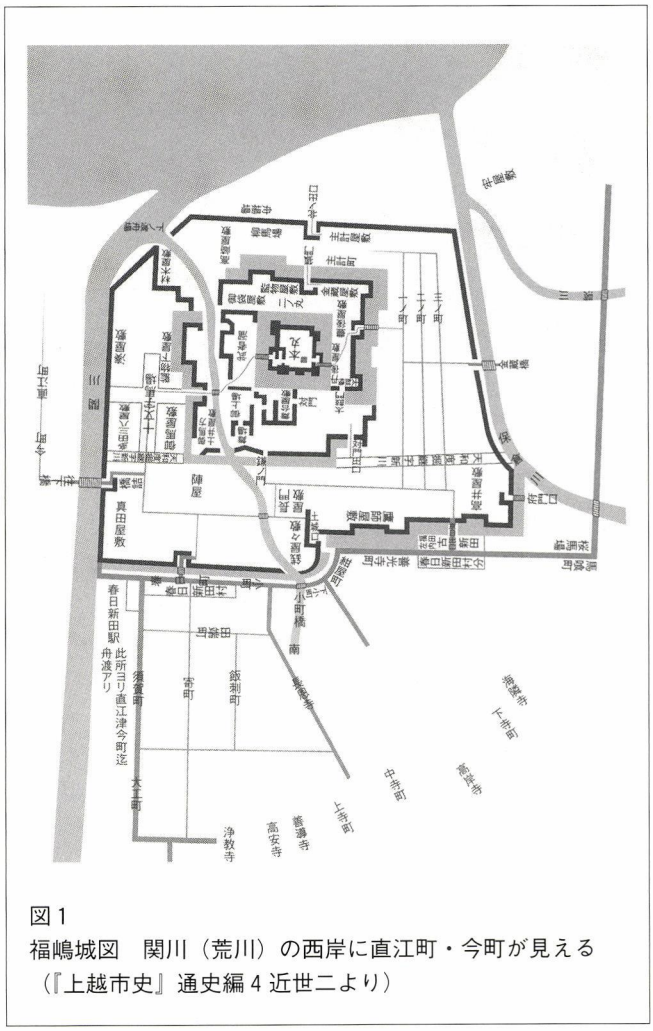
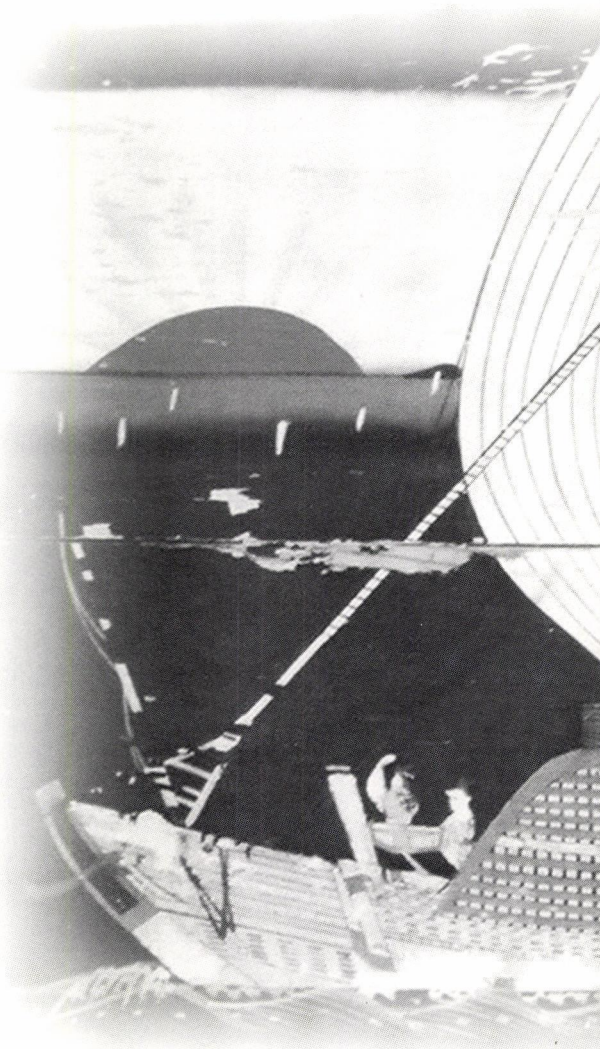


図1
福嶋城図　関川（荒川）の西岸に直江町・今町が見える
（『上越市史』通史編4 近世二より）



城は廃され、高田城が築城されてしまう。間近に迫った豊臣家との決戦・大坂の陣をにらんでの築城だったと考えられる。高田築城に伴って、福島城下の町は高田に移され、人々もまた高田へと移って行った。にぎやかだった直江津地区は火の消えたようにさびしくなったことであろう。わずかな間に、かつての国府・春日山・直江津に住んだ人々の多くが、高田へ移ってしまったからである。

抜け殻になった直江津には港の機能だけが残されたと考えられる。江戸時代のはじめには、その港の機能を支える今町が成立していた。福島城下の「今町」が発展したものと思われる。

今町は長く「今町」であって、「直江津」と



写真1
福永家文書　高田図書館地下書庫に整然と収められている
（上越市立高田図書館所蔵）

は呼ばれなかった。旧称である「直江津」を冠して「直江津今町」と呼ばれるようになるのは、江戸時代も半ば以降になってからである。さらに「直江津」が正式に町の名前となるには、明治を待たなければならなかった。「直江津」という地名は、一度は消滅したのである。

長くなったが、これから話しをするのは、この「今町」のことであることを、あらかじめお断りしておく。

今町と福永家文書

高田図書館の地下書庫に、他の史料群を圧倒する分量の古文書が収められている。一万点を超えるこの古文書は、質量ともに上越市内では最も充実していると言っていい。「福永家文書」、または「福永文書」と呼ばれている（写真1）。

福永家は今町の町人で、江戸時代中期以降には、代々今町の大肝煎を勤めるようになる家である。越前藩士であった同家は、江戸時代のはじめ、松平忠昌について高田へやってきて、侍の身分をすてて今町に住み着き、越前屋と称する商家となったと伝えている。

江戸時代を通して廻船問屋として活躍。また江戸時代後期には酒造業も営んだ。兵庫港の北風家は、司馬遼太郎の『菜の花の沖』にも登場する豪商だが、その北風家とやり取りした商用書簡も数通残っている（7ページ写真2）。

大肝煎ははじめ「大庄屋」とよばれたが、榊原家の高田藩主着任（一七四一年〈寛保元〉）以降「大肝煎」と改称した。大肝煎とは、何村かの庄屋を束ねて、藩と村を取り次ぐ役務である。今町においては、一人か二人の大肝煎が任命される。福永家のほかには石塚・川嶋・勝島・岩崎・前崎・滝沢などの家もこの大肝煎を務めた。彼らは、今町の大年寄とその執務所である町会所を通じて、町の丁頭や惣代たち、さらには今町の住人一人一人を統轄していたのである（8ページ　図2）。

福永家は今町の有力商人のなかでは、最古参とは言えず、少し遅く台頭したように見える。財力を蓄え、とくに高田藩主榊原家との良好な関係を築いて、今町の代表としての地位を不動のものとし、明治に至った。

庄屋や大肝煎は、その土地の資産家・名望家が勤めるものである。彼らは、地域の住民自治の頂点であると同時に、藩による住民支配の末端に位置づけられる藩の役人でもあった。そのため、彼らが役務で作成する文書、たとえば住民の戸籍から転入転出の届、税金の徴収の帳簿、土地台帳や土地売買の帳簿、さらには事件事故の処理書類にいたるまで、現在なら市役所などの官公庁で作成されるような文書が古文書となって残されている。古文書もまた、公文書なのである。

福永家文書は、その大肝煎福永家に伝わった。子細にみれば、町会所の文書、大肝煎の文書、戸長役場の文書、さらにはわずかながら福永家の商用文書などが混ざっているから、福永家が明治のはじめに戸長を勤めたことに

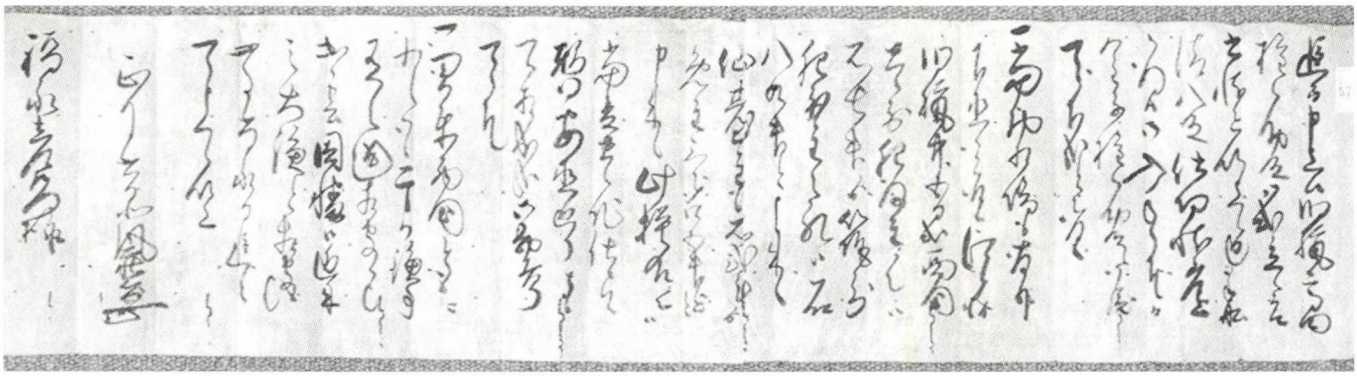


写真2
北風荘右衛門から福永彦左衛門に宛てた手紙（意訳）

追伸、去る十二月、高田の権之助殿がこちらを出発されました節に、手紙で申し上げましたとおり、福永家の船の清八どのへ、決算書をお渡ししました。入手されましたら、そのお金は権之助殿へお渡しください。

一、こちらの米相場も思いのほか安くなっています。江戸からは、去る十二月には、西国豊前、肥後では、金一両で一石七升から、筑前、肥前では一石八・九升と言ってきました。

〔中略〕

この様子では、この夏豊作になれば、おそらくさらに安値で移行するでしょう。参考にしてください。

一、関東・西国とも、干鰯漁が良いようです。出雲・因幡では最近にない大漁と聞いています。

正月六日　北風荘右衛門（花押）
福永彦左衛門様

（「福永家文書」上越市立高田図書館所蔵）

よって、江戸時代の町会所文書や大肝煎文書が同家に引き継がれたものだろう。

福永家が戸長を退いたのちもこの古文書は福永家に残された。今町の人々の貴重な記録であると福永家の人々に認識されていたためであろう。戦後、福永家から直江津町に寄贈され、整理が進められた。平成六年に市立高田図書館が完成すると、移管されて今日に至っている。

私たちが、現在からはるかな歴史を眺めるとき、古文書はその望遠鏡の役目をしてくれる。望遠鏡は口径が大きくてレンズの性能がよいほどよく見えるわけだが、福永家文書は高性能の望遠鏡と言ってよい。

今町のなりわい

福永家文書には、今町のどこに誰が住んでいて、何をして暮らしていたかが分かるだけの史料が残されている。ここでは、そんな今町に暮らした人々のおもな生業について、高性能の望遠鏡でちょっとだけ覗き見ることにしよう。

廻船問屋は、港町である今町の顔である。彼らは新町など中心街に大きな店を並べていた。今風に言えば、貿易商と倉庫業を合わせたような職業だった。今町には春先から秋おそくまで全国から大小多数の廻船が入港した。それぞれの廻船は、荷物を取り引きする廻船問屋が決まっていた。廻船問屋は、一〇軒ほ

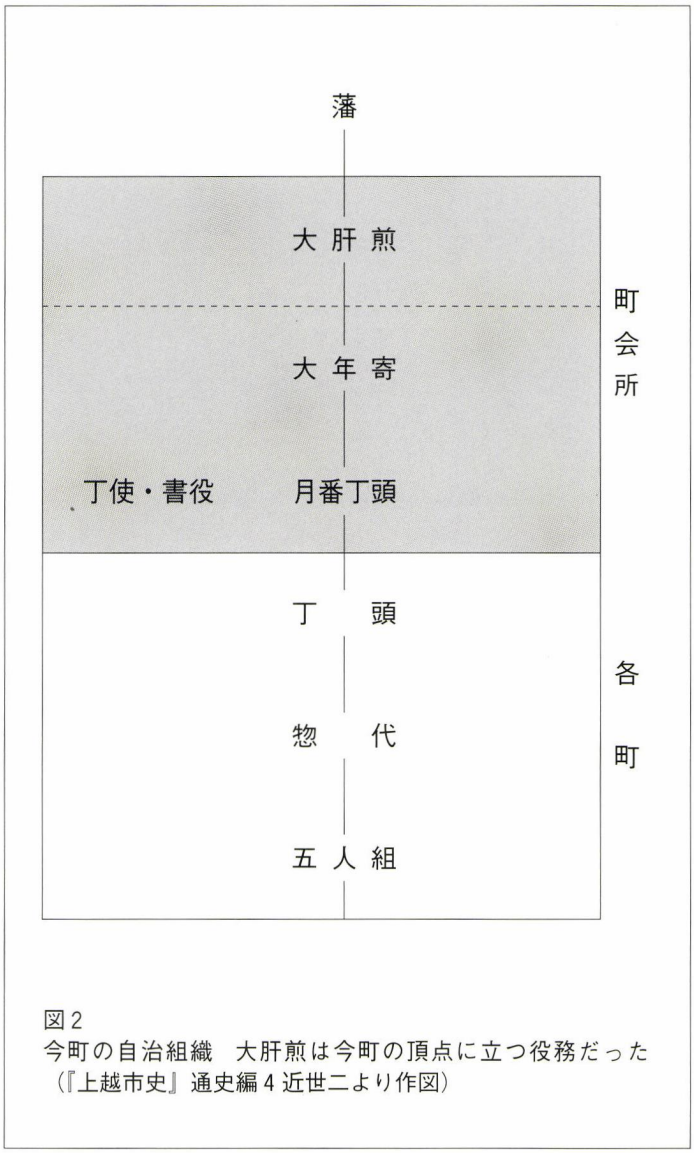


図2
今町の自治組織　大肝煎は今町の頂点に立つ役務だった
（『上越市史』通史編4 近世二より作図）

どあり、福永家もまた廻船問屋である。このほか、石塚家、扇屋、信濃屋、和泉屋などがあった。彼らの多くは、大肝煎や大年寄を務める家であり、それぞれ政・財界の両方において今町を代表する町人であった。

今町の港は、かれら廻船問屋を中心に回っているといってもよい。

例えば、今町最大の職業集団「小揚（こあげ）」は、港に出入りする廻船の荷物を積み下ろしするのが仕事であり、その指図は廻船問屋から受けた。最盛期は一五〇人ほど、明治はじめには減少するが、それでも八〇人ほどの就業者がいた。小船を使って沖合いの廻船と港を行き来する肉体頑健な彼らは、港の花形職業であったろう。また、難破船が発生した際には、荒海へ乗り出して人命救助にあたる命知らずのレスキュー隊でもあった。かれらは、寄町のみに住み、小揚頭のもとで強い結束を持ち、対抗する中町の木訳（きわけ）や出村の手船乗りとしばしば争った。木訳は材木の荷揚げに特化した集団であり、また出村手船乗りは小揚の補佐をする役目を持っていた。

木訳や出村手船乗りはおそらく、移出入量がピークだった江戸時代の半ばごろ、小揚から分化したか仕事を委託されたかで発生したのだろう。その後、荷物の取扱い量が減少することによって、それぞれ仕事を取り合うようになって、争いが絶えなかった。もともと腕っ節に覚えがあるから、しばしば腕力にものを言わせたらしい。とくに木訳と小揚の抗争は、裁判を繰り返しながら幕末まで続いた。この争いの古文書はたくさん残されている。明治維新のときには、小揚隊という自警団を立ち上げて今町の治安を守った。

余談だが、ライオン像で有名な高達回漕店には、近代の荷揚人足頭の木像が残されている。筋骨隆々とした肉体と鋭い眼光は、ちょっと恐ろしい。

ほかにも、廻船問屋の周囲に存在する職業がある。小宿と呼ばれる職業である。小宿は、いわば小さな廻船問屋である。福永家などの大きな廻船問屋たちは排他的な組合を作っていたから、そこへ新規参入するのはなかなか難しい。そこで小宿は大きな廻船問屋が相手にしない小さな廻船の荷物を取り扱った。小宿は五〇軒ばかりもあったが、しばしば、分限を超えた相手と取り引きをして、廻船問屋から厳しくとがめられた。これも古文書が



荷揚げ足頭　滝川美堂作
（撮影・北越出版）

残っている。

さらには、こうした廻船問屋をめぐって存在する職業の周囲に、多くの特定の商品を扱う問屋や仲買、そして小売業が取り巻いていたし、こうした商家に出入する奉公人達もたくさん住んでいた。また船乗り・水夫・船大工たちも多く住んでいた。港が彼らを養っていたのである。

廻船問屋とは直接関係ないが、今町に特有の生業に遊女屋がある。高田藩領内では、今町にだけ許された特別な生業である。遊女屋は中嶋町に置かれていた。長旅の途中の船乗りたちや、陸路の旅人、さらに地元の住民まで、毎晩大勢が訪れて不夜城と化した。多くの人々が命の洗濯をしたことだろう。中嶋町には、今町に一軒しかないすし屋があったりして、遊郭の賑わいをうかがうことができる。

こうして、多くの人々が交易港としての港に生活を依存していたが、いっぽうでは漁業も盛んだった。坂井町・新坂井町には、多くの漁師が住んでいた。今町の漁場は、西は名立との境から東は柏崎との境までだった。その間の犀浜の村々も漁業を行っていたが、彼らの漁場はそれぞれの村の沖合い五キロメートルまでにしかすぎない。そのさらに沖はすべて今町が漁業権を持つ漁場だった。今町はしばしば、漁場争いをしたが、そのおもな相手は、沖合いで漁場を共有していた出雲崎であった。

このように巨大な漁場を持っていた今町には、当然多くの魚が水揚げされた。残念ながら、漁業やその組織に関する詳しい史料が福永家文書には少ないが、多くの魚の仲買や小売業者が住んでいたことは分かる。小売業者の名称もいろいろあって、「魚商売」もいれば「五十集商（いさば）」もいる。店売から、振り売りまでさまざまな魚にまつわる商人がいたのであろう。今町は漁業をめぐって生計を立てる人々もまた、たくさん住んでいたのである。

ところが、この魚小売には大きな制約があった。

最初に述べた堀氏の時代、福島城下の田端町に塩魚・干し魚の独占販売が認められた（10ページ　写真3、「田端御条目」）。当時、内陸で食べられる魚がほとんど塩魚・干し魚であったことを考えれば、この特権の持つ意味は大きい。高田へ田端町が移ったあともこの特権は維持された。さらに一六六九年には、鮮魚類の販売についても田端町への独占が許された。今町に水揚げされた魚は、今町で消費される分以外は、高田田端町でしか小売できないことになったのである。

漁港である今町において、魚の小売が許されないというのは、現代の私たちにとっても奇妙である。漁港の市場に鮮度の高い魚を求めて買いにいきたいのは消費者心理でもある。

とはいえ、実際に魚を獲るのは今町の漁師である。今町の魚商人たちは地の利を利用して積極的に抜け荷、すなわち密売を行った。高田へ送らずに、在郷の村々へ直接魚を売りさばくのである。田端町は当然、これを藩へ訴えて魚小売が福島城下以来の自分たちの正当な特権であると主張した。田端町にとっても死活問題であったからだ。

その後、しだいに藩は田端町の特権を強化し、今町は苦しい立場に追い込まれていった。



写真3
田端条目　田端町の特権の拠り所として大切にされた「田端文書」の箱書き

覚

高田町城主様方よりの御命令書一、旧上下田端江代々の藩主様方御領分の生魚全部の取扱を御命令仰せ付を賜りたる書類なり

故に此書類は上下両田端御用の問屋並に株式会社田端協盛が宝らとして預り置きたる品なり

同上下田端
株式会社
協盛社

（仲町三丁目町内会所蔵）

このころ福永家はすでに、今町を代表する家になっていた。七代福永十三郎（11ページ写真4）は榊原家の高田入り直後の一七五〇年から今町の大肝煎となった。彼は、今町と田端町との長年の争いを幕府の裁判へ持ち込み、結果として今町の権限を大幅に拡大させることに成功した。営業税さえ納めれば、今町でも魚小売をしてよいと藩が許したからである。この功績によって、彼は後世、福永神社に神として祀られることになる（12ページ　写真5）。

十三郎は田端町と裁判を争ういっぽうで、宝暦地震の復興のために高田藩に莫大な献金を行っていた。深刻な財政難を抱えた高田藩はこれを喜び、十三郎に帯刀（刀を差すこと）を許す（12ページ　写真6）。こうして十三郎は今町における福永家の地位を飛躍的に上昇させ、さらには、裁判の結果を今町側に有利にすることの両方を成し遂げたのである。魚小売によって生計を立てる多くの住民の生活も救った。

この後も両町の争いは長く続いたが、江戸時代も終わりごろになると、全く違う局面が現れた。福永家文書には次のような事件の記録が残っている。

下昆子村（現牧村）の三蔵は出雲崎で塩まぐろなどの海産物を仕入れ、信州に送ろうと考えた。仕入れた荷物を船に載せ、上下浜（現柿崎町）へ運送し、牛八頭に移しかえて、水吉（現三和村）まで来たところで、高田町の問屋の手の者たちに取り押さえられた。

三蔵のやり方は、今町も高田もない話しである。この事件は幕府の採決をあおいだ結果、

これまでどおり、頸城平野を通過する荷物は、海上なら今町を、陸上なら高田を必ず通さなければならないことが確認された。今町にとっては、今町港以外で荷揚げを行われると港の衰微に関わるし、高田にとっては、高田の問屋を通さずに商品が流通すればおおいに困るのである。しかし、時代は変わろうとしていた。

近代になって、高田の町々が持っていた特権は消滅した。もちろん田端町の特権もである。田端町は我々を楽しませる飲み屋街となり、直江津の漁業も様変わりしてしまった。江戸時代の高田と今町の関係の出発は、福島城下町の高田移転にあったといっていい。田端町が高田へ移転しなければ、のちのちこんな問題は起こらなかったことだろう。高田と今町の関係は始めから歪められていたと思う。繰り返すが、田端町も今町ももとは福島城下の町だった。権力の都合で築かれた高田城は、頸城平野の流通・経済に歪みを生じさせ、人々の心に後世まで大きな影響を残したのである。

おわりに

今町の人々の生業を福永家文書を通して見てきた。筆者の能力や紙幅の都合もあって、駆け足になってしまったが、今町が交易港と漁業を産業の二本柱として歩んできたことは、理解していただけたかと思う。その歩みは福永家文書に確かに記録されていた。ここでは

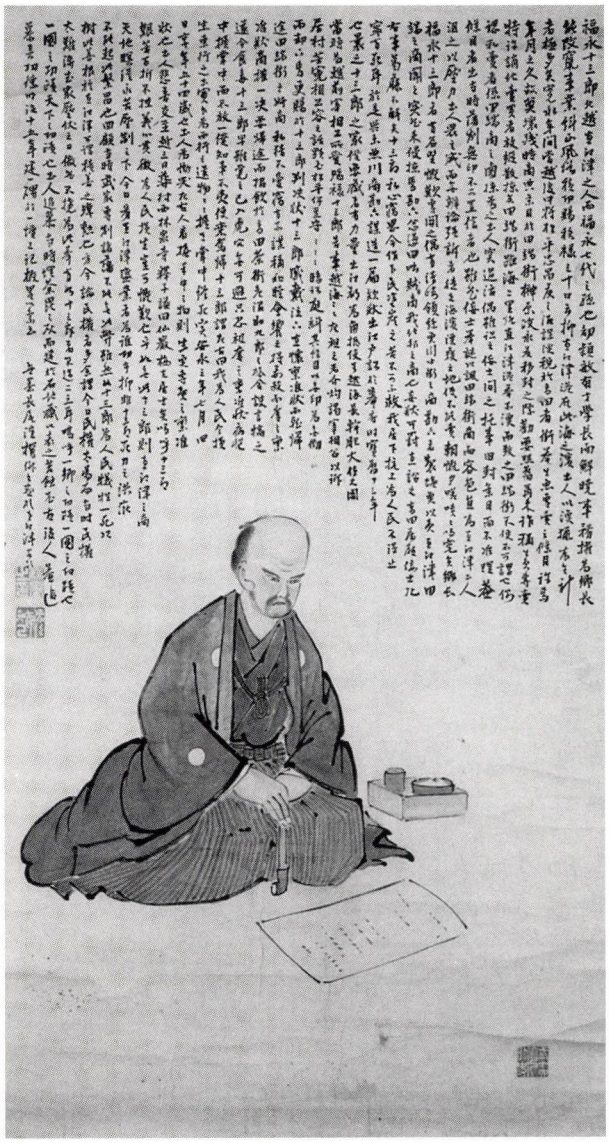


写真4
福永十三郎肖像画　大きな額は人格の象徴として描かれていると考えられている（徳泉寺所蔵）

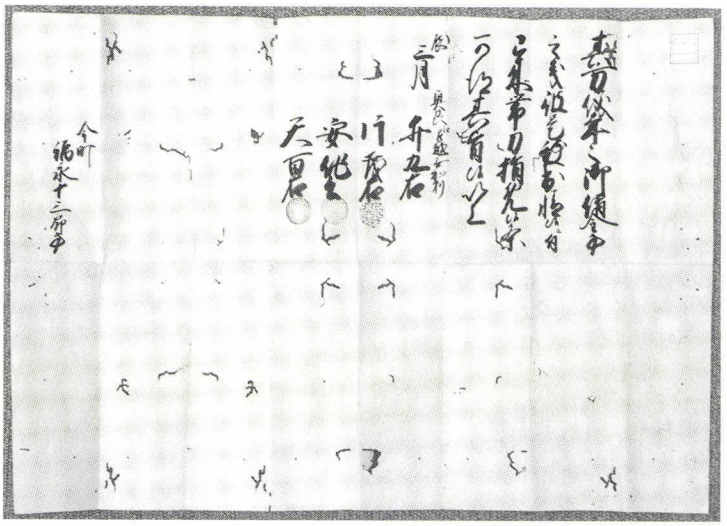


写真4
宝暦地震の復興のため十三郎は多額の献金を行った
福永十三郎の帯刀免許状（意訳）

その方は、毎年、藩の借金についていろいろと尽力したので、
今後、帯刀をゆるす。

辰　三月　奥州江罷越無加判

井　九右
片　茂右㊞
安　作兵㊞
天　百右㊞

今町福永十三郎

（「福永家文書」上越市立高田図書館所蔵）

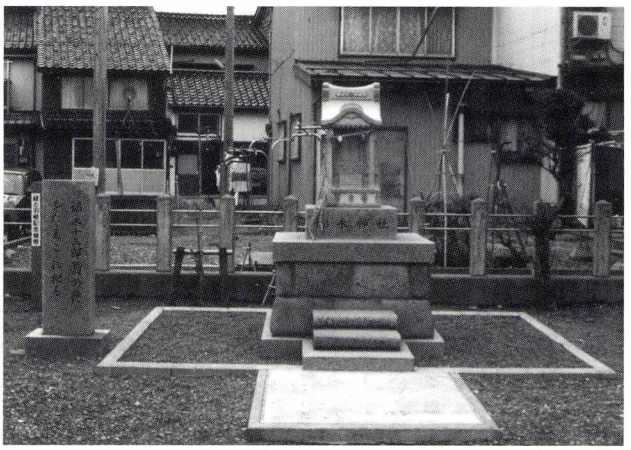


写真5
福永神社　現在は石の祠だが、かつては木造の神殿があった

紹介できなかったが、今町に生活した人々のそれぞれの記録も福永家文書には残されている。福永家文書がなかったとしたら、多くの今町住民の存在は闇へと葬られてしまっていたはずである。福永家の方々に感謝したい。これからも、大切にしていきたい、私たちの先祖の記録である。

まもなく、私たちの上越市は、さらに大きな都市へと生まれ変わろうとしている。私たちが、今ここに存在した証もぜひとも残していかなければならないと思う。

今町の人口や町並みについては、すでに「直江の津」の第一号に、上越教育大学の浅倉有子氏が紹介されている。また、『上越市史』通史編4　近世二にも詳しく触れられているのでそちらもご覧頂きたい。

参考文献

福永家文書（上越市立高田図書館所蔵）
『上越市史』通史編4 近世二（上越市、二〇〇四）
白銀賢瑞『直江津町史』（直江津町一九七五）
浅倉有子「福永家文書から幕末明治の直江津の町並みを復元する」（「直江の津」第一号）





旧秋元家の「望楼」と
蔵の錠前の装飾

「望楼」のある家

高岡市伏木北前船資料館

富山県高岡市の伏木は、越中国府の湊として早くから開けたところである。大伴家持が国司として五年間過ごしたことでもよく知られている。また、奥州平泉を目指して落ちてゆく義経一行が渡ったとされる「如意の渡」もある。

近世に至って、小矢部川の河口に開けたこの湊は北前船（ふね）の寄港地として栄え、明治以降も船主やその荷を扱う商人たちが近代的な廻漕業として新しい時代を築いていった。現在は富山港・富山新港ともに内貿だけではなく環日本海貿易の拠点ともなっている。

北前船の寄港地伏木は、十八世紀に鶴屋、西海屋などの八軒問屋と呼ばれる船問屋を中心に発達してきた。伏木北前船資料館（高岡市指定文化財）として公開されている旧秋元家も、屋号を本江屋（ほんごうや）といい文化年間から海運業を営み、当初は船頭や船員を泊める宿であったが、後に廻船問屋として成功し、明治に至って伏木銀行を起こすような力を持った。「あずまだち」と言われる切妻・妻入りの美しい建物の外観と茶室や全体に数奇屋風の繊細な屋内は、明治時代に大火で焼失したが、江戸時代の建築当時のままに建て直されたものだという。急な細い階段を昇る土蔵の上に設けられた望楼から港を見渡せば、海運で繁栄を極めた当時を偲ぶに充分である。

現在、三つの蔵のうち衣装蔵に「引き札」、調度蔵には航海用具や廻船問屋の貴重な資料が展示されている（もう一つは米蔵）。これらは江戸から明治にかけての伏木の繁栄ぶりを見せてくれるだけではなく、明治以降の直江津との深い関わりを示す興味深い資料がある。そのうち、直江津の問屋から贈られた「引き札」のいくつかを「北越商工便覧」に掲載された、贈り主の当時の店舗の様子とあわせて紹介する。

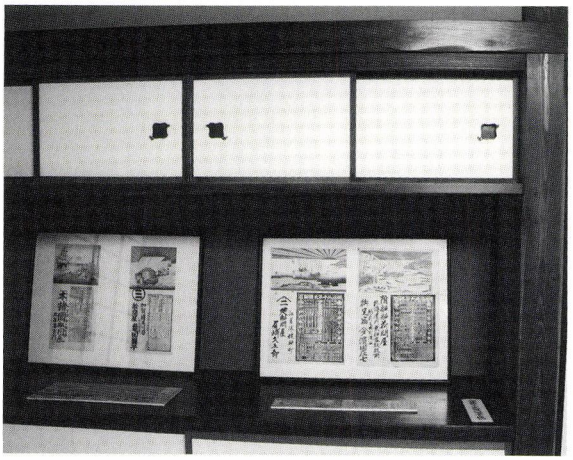
引き札は、チラシ広告とポスターを兼ね備えたようなもので、年始にお客に配られるため、めでたい絵や暦が刷り込まれている。大変豪華なものもあり、最近はコレクションの対象として多くのコレクターがいる。



右手は茶室　前方は表座敷



「あずまだち」といわれる妻入りの外観



奥座敷の床の間にも「引き札」が展示されている



三つの蔵と母屋をつなぐ雁木ふうの回廊は、船大工の技の粋を凝らしたみごとな天井。北前船の造船技術の高さがわかる



インターホン



望楼への細く急な階段と望楼から見渡す伏木港





大正から昭和にかけての伏木のまち　モダンな洋風の建物や望楼がある建物が見える

『北越商工便覧』

『北越商工便覧』とは、大きさが、ほぼ天地8センチ・左右17センチの和綴じの冊子で、明治22年に大阪府の川崎源太郎によって発行されたものである。当時、全国各地の「便覧」が、彼の手で発刊されている。

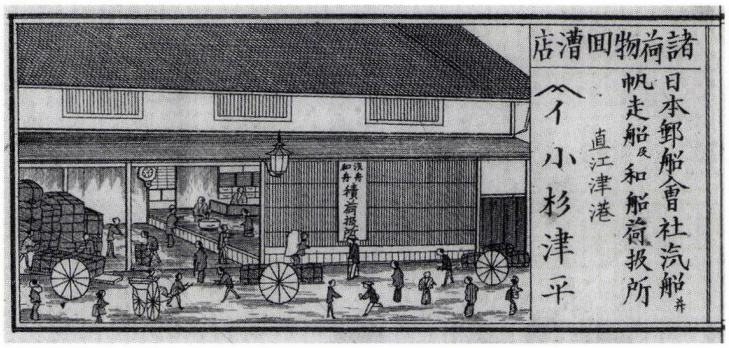
新潟県下の商工業者の店先が銅版画で掲載され、上越では高田地区が82軒、直江津地区が38軒掲載されている。

商工業者のガイドブックとして、料金を支払って掲載されているものと思われるが、大正13年に出された、「便覧」の写真版ともいえる『新潟県肖像録』と比較しても、店先の様子が良く再現されているのが分かり、単なる広告誌でないことが分かる。

ただ、不思議なことは「便覧」に掲載されている直江津地区の商工業者が「肖像録」では皆無なことである。

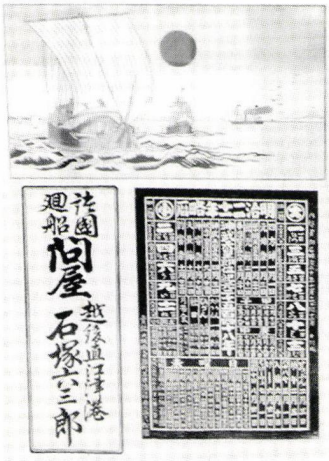


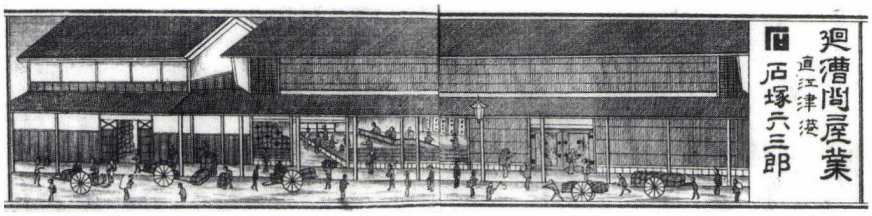
展示室になった蔵の中に、北前船の精巧な模型も展示されている





小杉津平の「引き札」(右) と「便覧」(上)

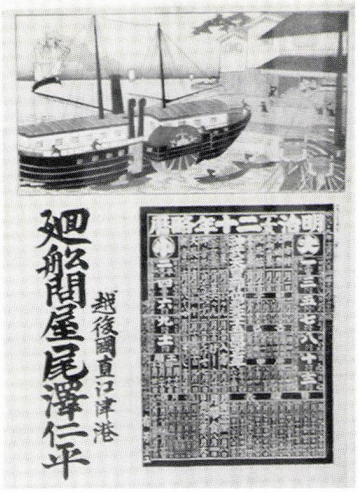




石塚六三郎　「引き札」には明治 21 年の暦が摺られている



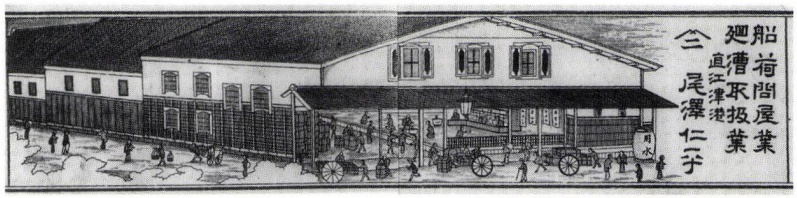
第一能登丸の定期航路

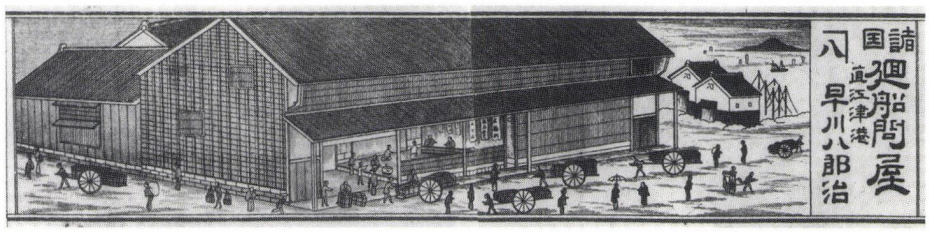


尾澤仁平　右の「引き札」には明治 20 年の暦が摺られている

早川八郎治　別に明治17年の暦が摺られ、和船が描かれているものもある





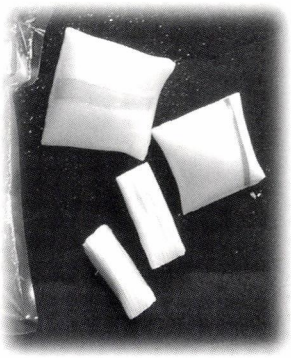


■「便覧」以外の写真は全て、伏木北前船資料館で撮影したものである。

［義］を忘れない人たち







松本市で毎年１月（例年、第２土日の予定）に「飴市」が行われる。

本来は初市を祝う、市神の祭りだと思われるが、地元では上杉謙信の「義の塩」が届いた日、永禄12年１月11日を記念して「塩市」として始まったものが、いつしか「飴市」に変わったということである。

戦前の松本の社会科副読本には――飴市は、塩を送ってくれた上杉謙信の恩を忘れないように開かれている――と書かれている。

当日は、塩を運んできた牛を繋いだという「牛つなぎ石」の周辺の通りに、福飴売りの屋台、だるまを売る子ども達、各町内の神輿が並べられて大変賑わう。

まちには、福飴とだるまを買わないと、一年が始まらないという雰囲気が漂っている。



牛つなぎ石に新しいしめ縄が張られている。

福飴売り（四角なものは、塩のカマスをかたどっている）の屋台が出、通りには各町内の神輿が飾られている。

ひろば

●日本初の女性従軍記者から国際的平和運動家へ

山岸（小岩井）多嘉子

やまぎし（こいわい）たかこ

日本初の女性従軍記者

日本で初めて戦線で活躍する女性従軍記者となった山岸多嘉子は、高田市中屋敷町（現上越市東本町三）に山岸宏隆の長女として、明治三九年三月十二日に生まれた。

父宏隆は家庭の事情から、学問を続けるために軍人の道を選んだ。しかし日露戦争で負傷し、まもなく除隊して高田へ帰郷した。当時、高田ではバテンレースがブームになっており、彼も「山岸バテン商」を起こし、たちまち品質が広く国内外に高い評価を得るまでになった。また政治家として、高田市会議員を経て新潟県議会の副議長にまでなった人である。

清廉潔白な政党政治家であった宏隆は、家庭教育においても大変厳格な人であった。そのなかで妻のキヨは、宏隆の始めた「山岸バテン商」の事業を取りまとめるかたわら、八人の子どもを育てあげた。

多嘉子は長女として母を助けながら、高田高等女学校を優秀な成績で卒業し、東京女子大学国文科に進んだ。大学卒業後、数社の出版社を経て「婦人公論」の記者となり、当時の満州（中国東北部）の取材記者として大陸に渡ることになる。彼女が満州に渡った昭和十二年七月七日、日中戦争の発端となる盧溝橋事件が勃発、そのまま従軍記者として戦線を巡ることになった。

前線での男顔負けの縦横無尽の取材ぶりは、同年九月二二日付け「報知新聞」の「北支戦線に咲き出た一輪のやまとなでしこ…カーキ色の乗馬服に、星章輝く戦闘帽をかぶる断髪男装の麗人が戦場を駆け回って…」という記事でも分かる。このときの従軍記が翌年『婦人従軍記』として中央公論社から出版された。

その目次を見ると、巻頭の「わが新しき日始まる」から、

風雲急！　満ソ国境を飛ぶ
わが集団農業移民
東部満ソ国境のスリル
南口攻撃従軍記
馬蹄方面運河地帯の激戦
疾風迅雷の山西作戦
暁の内蒙古



馬上の多嘉子
断髪の麗人従軍記者として注目をあつめた

従軍を終わりて

まで、取材はソ満国境、内蒙古、北支の最前線にまで至っていることが分かる。

内容は女性の繊細な感覚とヒューマニズム溢れるものであったが、当時の軍国主義下の日本で、当然ごとく東洋の平和は日本民族の手でという理想の下での戦争遂行であり、そのために国家に奉仕しようという気持ちは彼女も変わりなかった。

中国婦女協進会・白楊会の設立

昭和十三年十二月、多嘉子は東洋新秩序建設のための子どもの教育を思い立ち、上海に渡る。そのきっかけとなったのは、従軍記者として訪れた山西省で出会った子ども達の敵味方ない純真さであった。楊嘉香と中国名に変え、一四年一月、中国婦女協進会を組織した。これを対中政治工作活動として中国側から幾多の迫害を受けたが、常に微笑を絶やさない彼女の人柄は、現地の中国人から広大な邸宅を提供されるまでになり、日本軍部も浦東と上海を結ぶ白楊丸という専用船を提供してくれるようになった。この事業は終戦まで七年間におよび、毎日、六百余の子どもから中年婦人まで、生け花、作法、日本語などを学んだ。

終戦

「聖戦」と信じていた戦争も敗戦に終わり、一引揚者として郷里高田へ帰った多嘉子は、上海の東亜同文書院大学の教授で政治学者の小岩井淨との大陸でのロマンスが実り、昭和二二年九月結婚、第二の人生が始まることになった。これまで戦場を駆け巡っていた彼女は、この日から一人の女性として、また家庭婦人としての新しい生活を送ることになったが、当時、引揚者の住宅はほとんどなく、また、夫の淨は新しい大学の設立に日夜奔走し、家庭を顧みる暇もなかった。多嘉子は持ち前のバイタリティーから、米進駐軍の高官に直接交渉し、旅団司令部跡（高田城本丸跡）に住むことになった。

広い敷地の中で、二、三〇頭の山羊に雑草を食べさせ、その乳を売りながら生活する中国服の女性は、周囲には奇異に映ったかもしれない。

しかし、多嘉子には一つの信念があった。当時、進駐軍絶対の中にあって「敗れても日本人には大和魂あり」と説いて、戦後復興を叫んで講演して歩いた。すさんだ戦後の国民の心を変えるのは、婦人の暖かい〝母なる愛情〟だと考え、「婦人よ立ち上がれ」と上越一円を講演して回り、婦人参



日中友好協会の中華人民共和国国慶節祝賀会で挨拶する多嘉子

政権を主張し、婦人の団結を力説して新しい婦人運動への火を点じた。これがやがて高田婦人協議会や婦人同志会が結成される端緒となった。またこの間、新潟県の依嘱により、新憲法普及のための講師としても県内各地を巡回している。

愛知大学開学

東亜同文書院大、京城帝大、台北帝大など海外にあった大学の教授らが中心となって、新時代を築く若者を育てようと、新しい大学設立の運動が戦後直ちに始められた。多嘉子の夫小岩井浄もその一人として、奔走する毎日であった。

ようやく昭和二四年、当時の愛知県豊橋市長の協力により、豊橋市の元陸軍予備士官学校の跡地が提供され、愛知大学として開学の運びとなった。そして多嘉子も豊橋へ移り住むことになった。

ところが翌二五年、教授の宿舎であった公舎が進駐軍によって、突然接収されることになった。当時、進駐軍の命令は絶対であり、大学では困り果て打つべき手がなかった。これを知った多嘉子は、手紙でマッカーサー元帥夫人に直訴したのであった。公舎の接収は、アメリカが指導する「教育の尊重、人間の尊重」のたてまえから外れ、また居住権をも奪うような行為であり、即刻取りやめてほしいという主旨の手紙であった。これが効を奏し、マッカーサーの命令により接収は中止になった。ここにも彼女の、難局打開にあくまでも正々堂々と立ち向かう性格を見ることができる。

平和運動家として

戦後十年、日本はようやく復興が成りかけていたが、世界は再び緊張が増し冷戦の時代に入った。多嘉子は、かつては戦争に協力した自分であったが、力と力の対決ではなく、おたがいに手を取り合う、地域ぐるみの運動の中から平和が達成されると痛感し、市民に訴え、三一年「平和を熱望する豊橋市民の会」を結成した。翌年、イギリスの水爆実験を契機に、アメリカ、ソ連、フランス、イギリスの首脳に「世界平和」を訴える手紙を二度にわたって送った。その反響は非常に大きく、世界各国から賛同の手紙が届いた。

昭和三二年、愛知大学学長になっていた小岩井浄は、日本学術会議の代表としてダマスカスで行われたアジア・アフリカ法律家会議で「核爆発の現在および将来の人類に対する影響」について報告し、参加各国に反響を与えた。このとき中国を



街頭で演説する多嘉子

回って帰国した浄は、中国の復興ぶりの偉大さに感動し、それが多嘉子の訪中への意欲をかりたてることになった。

夫の死から二年後の昭和三六年、ようやく訪中を果たした。この一ヶ月の中国旅行は、その後の彼女の平和運動に対する考えを大きく変えることになった。それは、戦争反対と強烈な反米闘争に至るが、その根底はあくまでも平和を願う市民の立場に立ったものであった。

昭和三七年、新日本婦人の会愛知県本部の結成に参加、四一年には事務局長として、終始笑顔を絶やさず運動の先頭になって進んでいたが、七月一四日、二度目の脳出血を発症し再び帰らぬ人となった。

かつて彼女は、愛知県の依佐美(よさみ)通信基地が、終戦後も廃棄されず密かに米原潜の通信基地になっていることを正確な資料のもとに解明して、関係者を驚かせたことがあった。このように多嘉子の平和運動は、実践しつつ理論を打ち立て、直感によることなく科学的に実証していくというものであった。これは彼女の記者としての資質と夫小岩井浄の学者としての影響が大きかったといってよい。

戦後、小岩井多嘉子として平和運動の先頭に立つことになる山岸多嘉子は、女性初の従軍記者であり、また中国婦女協進会を設立するなど、結果として戦争推進者であったといえるが、しかし、その後の彼女の平和運動へ捧げた半生とその情熱、世界平和の希求は不滅のものである。

■本稿は久保田好郎氏が『頸城人物百年史・続頸城編』（新潟県上越人物研究会）等に執筆したものを筆者の了解を得て編集部において再構成したものである。

カメラの眼





食べ物、みやげ物などたくさんの屋台が雁木下に並んだ。下は、信金南支店脇に取り付けられた町内の史跡めぐりの案内看板。

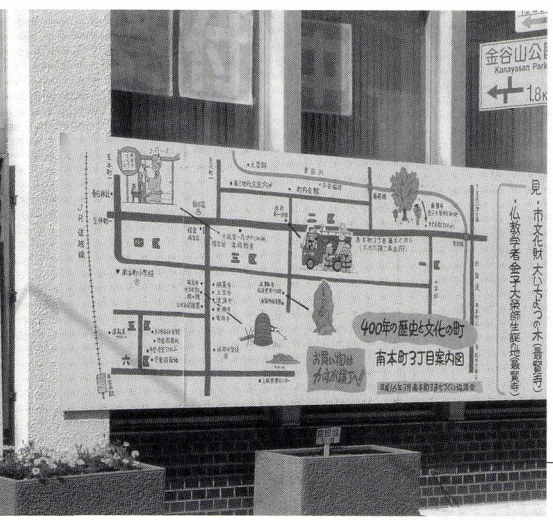
時代まつり

この秋、市内では色々な催し物が開かれたが、そのうちで高田地区で行われたイベントを少し覗いてみた。

南本町3丁目は、「400年の歴史と文化の町　買い物はかすが横丁へ」のキャッチフレーズのもと、レトロな街灯の設置、町内の歴史・文化財の掘り起こしと案内板の設置など、積極的に取り組んできた。そのひとつとして10月3日、「南本町3　時代祭り」が行われた。当日は、あいにくの雨と寒さで人出が心配されたが、幼・小中学生の演奏やメイン行事の佐渡の金を運ぶ時代行列を見ようと、雨を避けて雁木に溢れるばかりの人出となった。

9・10日には第6回城下町花ロードが開かれた。本町通をメインに150余の作品が展示された。その中で、本町7丁目の3軒の町家が、その魅力をアピールしようと、見学会、お茶席、甘味処などの催し物を開催した。

また、高田別院の「おたや」でも、かつての賑わいを取り戻そうと、数年前から有志の町の青年会有志が集まって、屋台や太鼓の演奏を行っている。







雨をついて行われた時代行列。雁木は雨を避ける格好の観覧席になった。

おたや







若者達によって、地域の行事として新しい
「おたや」に変わりつつある。

花ロード







年々賑やかになる花ロードだが、上越のシダ（羊歯）だけをディスプレーしたのは出色。













空き店舗で７人の女性が開いた甘味処、実際に営業中の呉服店でのお茶席、瀟洒な座敷をわざわざ開放・見学させてくれる商店など、訪れた人達は町家の魅力を堪能した。





11 月、かつて開いていた「麻糸商」の記憶を止めようと、麻糸作りを伝える久保埜夫妻（名立）を迎えて実演が行われた。

久比岐つれづれ

例によって、ぶらぶらとまちを歩いていたら、曹洞宗のお寺の入り口に、妙な赤茶けた小さな石が置いてあるのを見つけた。漢和辞典にも見かけない文字が刻んである。読めないが背筋が少々寒くなるような文字である。なにやら、修験道とか山伏とか、はたまた烏天狗が飛来してきそうな不気味な文字で、とても禅寺には似つかわしくない石文（いしぶみ）である。

と横を見ると、今まであった家が取り壊されて駐車場になっている。そこから、今までは見ることができなかった光景が目にとび込んできた。あのラーメン屋を義経ゆかりの寺の方から、右肩上がりの斜線が横切っている。直江津の砂丘がいかに急であるかが、とてもよく分かる光景である。

それにしても、この店の佇まいをなんと表現したらよいのか、あれは「〝千と千尋の神隠し〟の冒頭シーンの食堂」と、まことしやかに言う映画通、カウンターで箸を置くと「転がるんだよね」と嬉しそうに言う若い女性（実際には転げない）。休みの日には、県外ナンバーの方が多い駐車場。旅の途中、列車の乗換え時間があったら、必ずこの店のラーメンを食べるようにという、様々なジャンルの仲間たちのＩＴ情報網。

たぶん、このまちで〝一番メジャー〟な店かもしれない。そして、そのような情報にびくともしない店かもしれない。

中世の異様な石文、ラーメン屋の佇まい、これらが渾然一体、同じまちに同じようにして、ゆるゆると時間を共有して生きていく、そうするには大変な労力が必要な時代になってしまった。しかし、じつは時代に翻弄されない本当の〝まち〟のありようではないかと思った。

内田邦夫コレクション展

上越総合博物館
平成17年1月16日まで



クラフト作家内田邦夫の作品40点余と彼が収集した世界の民芸品・絵画等260点を展示している。

内田は明治43年南城町に生れ、京都東山で陶芸の窯を開いた人である。

彼は日本における「クラフトデザイン運動」の草分けであり、日々使われる生活用品に、機能性を兼ねたデザインの要素を主張して、美術館で鑑賞するような作品ではなく、安価でかつ機能と美を備えた工芸品を“クラフト”と呼んで、自らの陶芸作品にもそれを反映した作品を作りつづけた。

今日、有名作家の高価な「民芸品」ブームのなかで、ともすれば忘れ去れられがちな“内田のクラフト”を間近に見られる絶好の機会といえる。

上越なおえつ信金倶楽部講演会

去る8月20日、上越なおえつ信金倶楽部恒例の納涼会に先立ち、「防衛講話」と題して、陸上自衛隊高田駐屯地第二普通科連隊長阿部金二一等陸佐の講演があった。

テーマはイラクに対する人道復興支援の現状、自衛隊のＰＫＯ活動の実績・経験の一つである異文化への対応の仕方とイラクの現状について等、通常マスコミ等で知ることが出来ない自衛隊員の日ごろの日常生活が多くのスライドで紹介された。

また、7月13日の「新潟・福島豪雨」に対する、延べ1500名、500台の車両による災害派遣の模様も貴重なスライドで紹介された。

最後に自衛隊として想定する「二つの有事」として、

「いつ起こるか分からないが、起こらない場合もある」のが防衛任務

「いつ起こるか分からないが、必ず起こる」のが災害派遣であり、平素の訓練はそのためにあると結んだ。

講師の阿部氏は福島県出身、昭和50年、防衛大学19期として卒業。平成14年から高田駐屯地勤務。

■読書びと



反省文 ハワイ

山口智子著

ロッキング・オン刊
二〇〇〇円（税別）

『反省文 ハワイ』、本年六月に上梓されたこの寓意的な書名の本は、衛星テレビの番組『Letters 彼女の旅の物語』という、六篇の映像作品の製作より生まれた、山口智子の二冊目の著作である。彼女が企画と事前取材、インタビューのすべてを行い、そのノンフィクション番組は成った。

トルコ、イベリア半島、アイルランド、ルイジアナ、南米チリ。限られた予算の中、ロケハンもかねて南北四〇〇〇キロ以上にわたるチリの国を約一ヶ月かけて単身縦断した山口は、その間したため続けた文、写真、イラストを纏め、処女作『手紙の行方―チリ―』（ロッキング・オン 〇三年五月）として世に問う。〈私は、ほんとうに何も知らない。〉というコピーそのままに、「見たい」「知りたい」という旅への想いが、未知の国の歴史と独特の文化を伝える手紙ともなって、紙価を高めた。そして二〇〇二年六月、旅の最終地点に選んだハワイに、彼女は一人降り立つ。

山口智子は一九六四年栃木県に生まれ、青山学院女子短大を卒業後、モデルを経て女優として成功する。テレビのコマーシャルに出ていた山口を細君が「このひといいね」と評するのを聞いた。結婚後ドラマから遠ざかっていたが、二〇〇四年の正月には『向田邦子の恋文』で復帰、演出の久世光彦が「邦子さんが乗り移っているようだ」と表現したように、愛憎の時をひたむきに、そして優しい眼差しで演じきった。

『反省文 ハワイ』に印象的なシーンがある。ハワイ島ワイピオ渓谷でタロ芋水田を守り、ノーズ・フルートという不思議な古代の楽器を奏する人物を尋ねた撮影チームの一行を、男はポリネシアに伝わる、威嚇と名乗りの儀式で迎える。

「私の番がやってきた。『私はトモコ。名前の意味は、インテリジェンス。賢くあれという願いを込めて、祖母がつけてくれた名前です。』心臓がばくばくしていたが、足を踏ん張ってまっすぐ答えた。『いい名前だな。』男の顔が、かすかに緩んだ。」

文字を持たない古代ハワイ語は、すべて口承で伝授されてきた。チャントと呼ばれる朗唱とフラで言霊としての歴史と文化を伝える。我がアイヌ語と同じである。名前に籠められたその意味を、大切に受け止められる世界との邂逅の悦び。

「私が、これから記そうとしているのは、ハワイへの、心からの反省文だ。私がずっと長いこと犯してきた、たくさんの誤解、たくさんの失礼。ハワイよ。ほんとうにごめんなさい。そして、ハワイよ。この書を綴る言葉は、あなたへの尊敬と感動と憧憬と、もしかしたら愛のようなもの。」との書き出しの一節が、この本の言葉が、前作ほどには軽やかに胸に染みてこない理由の全てを物語る。恋文も懺悔の手紙も、他者には重すぎる。

それでも、池澤夏樹の佳作『ハワイイ紀行』（新潮社）と異なる報告を、『反省文 ハワイ』は伝える。フラとチャント、キラウエア火山、ロビンソン家、タロイモ、ホクレアの航海、など池澤が魅せられたキーワードを辿り、東西に連なる八つの島々を巡る。著者の手になる言葉と同等に主張する秀逸な写真も同じく五〇カット。別の入り口より作家と女優が垣間見た、先住ハワイ人の濃密な文化と自然を、八年の時を隔ていま共に手にしている。

トレンドのドラマによって定着されたイメージの底に秘められていた、「世界は、ぐらぐらとアンバランスな天秤の上で揺れている。」と感ずる山口のひたむきな懸命さを、私は愛しいと思う。荒削りで想いを消化しきれない言葉のつながりが、研ぎ澄まされた文体以上に彼女の思想と、なによりもハワイという地域の抱える重層的な課題と現実を読み手に伝えてくるのだ。

キラウエアの黒い溶岩の上に立ちつくし、ダウンタウンの場末の食堂で独りポイを食べた、あの時間が『ハワイイ』という存在そのものへの愛着の私の原点である。私達にとって、この海辺の小さな町での生活の外に、世界のどんな風景と時間との出逢いが必要なのだろうか。冬を前に、よき女人の眼との邂逅を感じた一冊であった。

（深）

海西 東陸



カツどんに一家言（？）持った人がいて、カツどんの三原則というのを聞いたことがある。氏曰く、①どんぶりの周りは多少油ぎって、②蓋はベレー帽をかぶったように斜めに乗り、③カツ・たまねぎ・卵とじ・グリンピース二個くらいがはみ出して見えなければいけない――と。①は別にして、②③は、まあ大方の理解を得られるのではないだろうか。

カツどんは、カツカレーに遅れること三年、大正一〇年、早稲田の学生中西敬二郎の発明というのが定説になっている。どんぶりご飯にカツを乗せ、彼が考案した特製ソースをかけて、店の主人に〈カツどん〉として売り出させた。

このカツはカツレツといわれるもので、ぶ厚い豚肉を厚い衣で包み、天ぷらのように揚げた、いわゆる〈とんカツ〉ではない。切り分けて、千切りキャベツを添えて食べる日本独特の〈とんカツ〉は昭和四年に発明された。〈卵とじ〉も乗っていないが、親子丼が明治一〇年代に発明されているので、それが加わり、カツレツがとんカツへと替わるのに、さほどの時間は必要なかったことであろう。

以前、東京人の――新潟市で〈ご飯・千切りキャベツ・カツ〉に遭遇してカルチャーショックを受けた――というエッセイを読んで驚いたことがある。筆者もその頃〈卵とじ〉以外のカツどんなど想像だにしなかったのである。この新潟市に加え、桐生市、福井市を〈ソースカツどん〉日本三大発祥地と言っている向きもあるらしいが、駒ヶ根市も発祥地を宣言して、美味さでは最強のブランドになっている。

ものの東西をいわゆるフォッサマグナで強引に分けようという説に組するものではないが、卵とじとソース（キャベツの有無は不問）の分布はどうなるのか。県内では、上越地域は〈卵とじ圏〉らしい。

北海道に〈讃岐うどん〉を自ら打つ地域がある。明治時代に移住した〈香川もん〉がふるさとを忘れまいとして食べている。一方、九州のあるまちでは、讃岐ではもう幻になった技（食べ方）が伝えられているという。これも明治時代に香川で修行した人が技をふるさとに伝えて、定着させたものである。これらは「面」として伝わっていくのではなく、瞬間移動のように「点」として伝えられている。

話題をカツどんに戻すと、その分布は「面」ではなく、前記のような「点」として存在するようだ。〈初期ソース〉と〈卵とじ〉が並立していたころ、それぞれの好みによって、〈キャベツ系〉も含めて、全国へ点々と散っていったものと思われる。たまたま東京では〈卵とじ〉が残り、東京中心の情報の流れが〈カツどん〉は〈卵とじ〉という錯覚を生じさせたのではないか。

司馬遼太郎は、旅先で昼食に困ったとき――どこでも安心して食べられるのは、カツどん――だと言っている。文脈からみて、これは〈卵とじ〉に違いない。とすると、やはり〈ソース〉はマイノリティーなのだろうか……。

（涎）

註記・この稿を書き終わる頃、かつて高田の駅前で「一口カツを並べた中心に鮨のガリを置いたソースカツどんを食べたことがある」という話を聞いた。ガリの味が絶妙に合っていたということである。この人の生地山形県は、ほぼ全域〈卵とじ〉だという。

歴史の風景









右上　拓影・原寸（写真／上越市教育委員会）　右下　銅印（写真／上越市教育委員会）

左上　発掘現地説明会　見学者の向こうに見える四角い建物はＪＡの倉庫で、山麓線の大学前交差点前にあたる。

左下　公園に建つ記念碑

銅印（どういん）　江向（えむかい）遺跡出土

上越市指定文化財　上越市大学前

平成四年、大学前土地区画整理組合（大学とは上越教育大学）による土地区画整理事業に先立って発掘調査が行われた。山麓線大学前交差点から上教大に向った南側一帯である。

遺跡は八世紀後半～十世紀と十五～十六世紀の二段階の遺構が発掘された。そのうち十世紀、平安時代の遺構から縦三・一㎝／横二・九㎝／高さ二・五㎝青銅製の〈ハンコ〉が出土した。県内で初の出土例であるばかりではなく、朱肉として付けられた顔料が印面に残っており、X線分析でベンガラであることが判明した。出土の印鑑から顔料を特定できたのは全国でも初めてのことであった。

彫られた文字は「高有私印」と読め、頸城に「高志」という氏族がいたことが知られているので、当時の印鑑の例から〈こしのきみ〉の「〇有」と名乗る人物の私用の印鑑と推定されている。

「〇有」は残念ながら特定されていない。平安時代に印鑑を使用したのは行政府のみであり一般には普及しておらず、さらに発見された建物跡が一棟であることからすると、役所ではなく役所に勤務した、それも越後国では相当な地位にいた人物の居宅と考えられる。

当時の風景はどのようなものであったのか、瀟洒な住宅に囲まれた公園の一角に建てられた区画整理記念碑と「江向遺跡　銅印出土の地」の碑によって想像を逞しくするほかない。

＊銅印／上越市埋蔵文化財センターに展示中

＊資料／『上越市史・考古資料編』『上越市の文化財』

発刊のことば

直江津は、越後発祥の地という歴史を振り返るまでもなく、日本各地から山海の物産が集まり、四方に送り出す商いの場でした。そこに行き交う人びとが織りなす人間模様は、地域に文化を育て、数々の物語も生んできました。

これは、経済の拠って立つ場が文化を育む地でもあり、それらは別個のものではなく、根を同じくする一本の樹であることを実感させてくれるものです。

本誌は、経済であれ文化であれ、今からその種を播き、苗を育てようとする人たちのために、直江津を掘り起こし、耕しておこうというものです。そして、後々もう一度地域を見直そうというとき、その原点になるような深く地域に根ざしたものでありたいと考えています。

本誌に敢えて限定された地域名を付したのは、それが排他的なものでないことは言うまでもありませんが、社会が指標を失って混迷する今日、自らが立つ、足元の「地べた」を検証し直すことによってのみ、経済、文化、環境などあらゆるものへの問題提起、提言、行動が可能になると考えたからです。

本誌が広く共感を得て、上越（かみえちご）後全体の地域振興に寄与できることを念願する次第です。

平成十三年三月

■編集室から■

冬号編集中の一〇月二三日、夕方六時少し前、突然、家が揺れだした。地震の揺れに驚いて物につかまってしまったのは新潟地震以来である。午後の授業が始まる直前のことであった。砂丘の上にある校舎がぐらぐらと揺れだし、机にしがみついたことを思い出す。「グラウンドへ集合」と言う指示も聞かず、校舎をとびだして海を見に行った。異様にきれいな海の色と潮が引いていくのが分かった。その頃、「日本海には津波は無い」と教えられていたので、誰もその危険性など考えてもみなかった。

新潟地震は県都で起きたせいもあるのか、比較的情報が早く届いたような記憶がある。また、地震の現場中継としては始めてのことではなかったかと思うが、TV中継の威力も実感させられたものである。それに引き換え、阪神淡路大震災にしても今回の新潟中越地震にしても、情報の伝わり方が遅く感じられる（日ごろ、あまりにも情報量が多すぎて少しでも遅れると、そのように感じるのかもしれないが）。もっと早く状況を把握するシステムが必要だろう。

起きなければいいと思うが、この上越地方も地震の空白域として残っているらしい。次号では、上越の過去における地震の歴史をお伝えしたいと思っている。また、高田の城下町の成立についてもお届けする予定である。

第5巻1号　3月1日　発行予定

年間定期購読（4冊1920円・送料込み）を受け付けております。ご希望の方は編集部までご連絡ください。

季刊「直江の津」冬号
第四巻四号　通巻十六号
発行日／平成十六年十二月一日
発行所／直江津経済文化研究会
上越市中央二－一－八
上越信栄社内
☎〇二五（五四五）〇二〇二
発行者／上越なおえつ信金倶楽部
発行責任者／中川虎三
編集協力／㈲北越出版
責任者　佐藤和夫

内容・投稿などの問合せ先
北越出版
〒九四二－〇〇八二
上越市国府三－九－五
FAX〇二五（五四三）二〇二五
E-MAIL hokuetu@seagreen.ocn.ne.jp

季刊

直江の津

発行／平成十六年十二月一日■発行者／上越なおえつ信金倶楽部■発行所／直江津経済文化研究会■制作協力／(有)北越出版■表紙構成／小谷充

頒布価格／三〇〇円（送料一八〇円）